



自然の解説者

春季号 [第63号] 2019年4月15日

NPO 法人

ぐんま緑のインタープリター協会紙
事務局：〒371-0103 前橋市富士見町小暮
2425-28 櫻井昭寛方
電話・Fax 0274-42-2726
<http://inpuri.web.fc2.com/>
編集：総務企画部会

新年度を迎えて

理事長 関端 孝雄

協会員の皆様には、日頃から協会の運営や数多くの行事の実施につきまして、ご支援ご協力を頂き深く感謝申し上げます。本協会は平成15年に設立され、今年度で創立16周年を迎え、お陰様で協会員は160余名を数えます。

まもなく平成の時代は終了しますが、協会の目標とする所は今までの内容を一層深化するよう努力することです。即ち「人と自然の架け橋」になるよう緑のインタープリターとして組織的な活動をし、それを通して「人と自然の共生」及び「循環型社会の構築」を目指すことです。

人と自然の架け橋になる為には、まずは物言わぬ自然と会話することが必要になります。それには自然の声が聞こえなければなりません。その声は自然の形(姿)から生まれます。自然は大地、水、空気などの環境と生き物から成り立ち、全体がまとまりを持った働きをしていて「生態系」と呼ばれます。この中で複雑な構造を持つ相観は森林です。森(生産者)の中には色々な動物(消費者)や菌類(分解者)達が生活をしています。先ずはこうした姿を読み、森に代わってその声を子供達や多くの人達に伝え、森の素晴らしさや大切さを感じて貰えるような活動をしたいと考えています。



また、現在我々が日常生活の中で細やかに注意し、努力しなければならない行為があります。それは人間が引き起こした地球温暖化現象です。この現象によって海面や海水温の上昇、海の酸性化、酸素濃度の減少などを引き起こし、食い止めるのが極めて困難な状況です。その結果、世界中で一連の異常気象が起こっているとされています。その為、脱炭素社会を実現することが急務であり強く求められています。

本協会の活動内容は緑のインタープリターとして自然体験教室を初め、各種の受託・協力事業や森林整備の活動等々幅広い行事を予定しています。多くの皆様に積極的に参加して頂き、充実した活動をお願いいたします。

結びに、本協会の発展と協会員皆様のご活躍を祈念し、新年度を迎えての挨拶といたします。

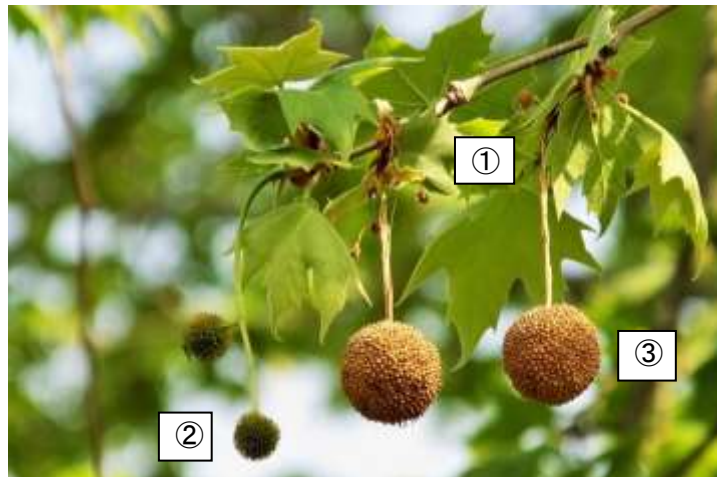
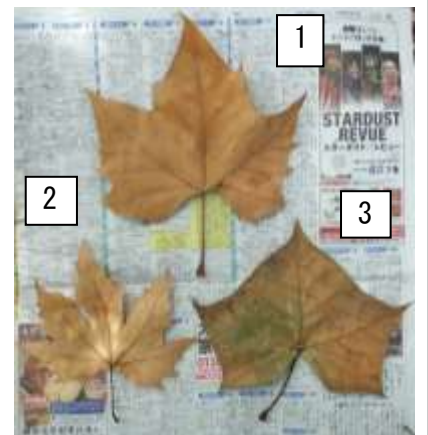


校庭の樹木⑨ 異国的雰囲気のあるモミジバスズカケノキ

顧問 亀井 健一

太田市立生品小学校の校歌に「鈴懸」の語句が詠まれています。校庭にはモミジバスズカケノキの大木が数本並んで植えられています。本種としては県内でも大きい部類に入るでしょう。この木陰で児童たちが車座になって、活動後の反省を話し合っていました。この情景を見て、校庭の「鈴懸」に見守られながら、子どもたちは成長していくのだと思いました。ふと、ギリシャの哲学者の話思い出しました。古代ギリシャの哲学者たちは、スズカケノキの木陰で人々に学問を説いたので、この木は「学問の木」と呼ばれていたそうです。

日本に渡来したスズカケノキ科の樹木は3種ですが、このうち群馬県をはじめ全国的に多く植えられたものはモミジバスズカケノキです(他の2種は非常に少ないとのこと)。主に公園樹や街路樹に多く見られますが、ときに校庭にも植えられています。カナダの国旗のような形をした大きな葉や、迷彩服の模様 に似たまだら模様の樹皮が目立ちます。見る機会の多いモミジバスズカケノキの特徴を上げておきます。落葉高木で、樹高は最大35mほどになります。スズカケノキとアメリカスズカケノキとの交配種です。葉は互生し、葉身は長さ10~18cm、広卵形で掌状に3~5裂します。雌雄異花と言って、同一株に雌花と雄花がつけます。花期は4~5月、雄花序は直径約1cmの球状で、細長い雄花が多数球状に集合したものです。花粉を放出すると不要になるので落ちてしまいます。雌花序は直径



①落下寸前の雄花序 ②若い集合果 ③2年目の集合果

- 1: モミジバスズカケノキ
- 2: スズカケノキ
- 3: アメリカスズカケノキ

目立ちます。見る機会の多いモミジバスズカケノキの特徴を上げておきます。落葉高木で、樹高は最大35mほどになります。スズカケノキとアメリカスズカケノキとの交配種です。葉は互生し、葉身は長さ10~18cm、広卵形で掌状に3~5裂します。雌雄異花と言って、同一株に雌花と雄花がつけます。花期は4~5月、雄花序は直径約1cmの球状で、細長い雄花が多数球状に集合したものです。花粉を放出すると不要になるので落ちてしまいます。雌花序は直径

約 1.5cm の球状です。秋に熟し茶色になった集合果は、直径 3~4cm になります。なお、雄花序、雌花序、集合果は他の 2 種もほぼ同じ様です。3 種の渡来時期については、諸説ありますが、明治時代に相次いで渡来したようです。

和名スズカケノキ（鈴懸の木）は、垂れ下がる集合果を山伏が首に懸ける鈴に見立てた名です。和名プラタナスは、学名の一部である属名（Platanus）に由来し、この 3 種を指すだけでなく、総称として使う場合もあります。

東京大学小石川植物園（文京区白山）には、この 3 種の見本樹があり比較観察が可能です。植物園に設置された解説板の説明を参考にまとめておきます。

種類	分布域	葉の切れ込み	樹皮	集合果の付き方
モミジバスズカケノキ （下記 2 種の交配種）		下記 2 種の 中間	灰白色と緑褐色のまだら 模様	一本の軸に 2~3 個つく
スズカケノキ	ヒマラヤ地域~ バルカン半島	深い	上記と似た模様になる	一本の軸に 3~7 個つく
アメリカスズカケノキ	北米東部	浅い	暗褐色で縦に細かい割れ 目ができる	一本の軸に 1 個づつつく

<協会に対する支援>

3月9日(土) GNホールディングス株式会社様に 2019 年度「大人のための自然教室」の受講生募集広告を上毛新聞に掲載頂きました。

3月28日(木) 公益社団法人日本フィランソロピー協会様より、活動資金として 20 万円寄附頂きました。

3月28日(木) 群馬銀行様より、環境教育や環境保全などの活動に対し環境財団賞と副賞 20 万円を頂きました。

<活動報告>

会員資質向上研修 7 講演会「森林と林業について」 2月16日(土)

前橋市総合福祉会館 総務企画部会

大松稔講師から赤城南麓の森林整備は、里山の景観維持と侵入竹の伐採、除去などの地域環境保全が目的であると伺いました。協会も森林・山村多面的機能発揮対策事業で森林整備を実施してきたこと、とりわけ、赤城南麓の広大な松林のマツクイムシ被害についての実態と早期復旧の必要性など、カスリーン台風を教訓にした問題提起がありました。

また六本木太さんと登坂璋典さんのカスリーン台風の体験から、山津波（土石流）被害の防災、減災には、“いのちの森”造りがどうしても必要なことを聞きました。

赤城南麓森林組合石塚課長からは太陽光発電所造成のための伐採により、土砂が農地に流入して、田畑を破壊してしまったケースも伺いました。

参加者：協会員 27 名。（吉永）

シダ観察会 2月19日(火) 県立観音山ファミリーパーク 総務企画部会

講師に群馬県自然環境調査研究会の里見哲夫氏を迎え、協会員 25 名が参加して、シダの観察会を行いました。屋内で講師の採取してきたシダを見ながら構造や特徴の説明を聞きました。その後、中央～森の美術館～南コースに出て 12 種のシダの観察をして、ネームプレートをつけました。昨年に続き 2 回目の観察会なので、参加者の興味も旺盛、知識も上積みされ、実の有る観察会でした。（大畠）

Mサポふれあい祭り 2月23日(土) 前橋プラザ元気 21 受託協力部会

五種類のネイチャークラフト（バードコール、ウッディピンチデコレーション、しの笛、ネームプレート、竹とんぼ）を実施しました。来場された方々は熱心に作り、完成した作品を笑顔で持ち帰られました。また、早速身に付けて行かれる方もいました。協会員 13 名が参加し、緑の募金は 4,475 円集まりました。（角田）

第 5 回写真展 3月7日(木)~10日(日) 吉岡町文化センター 自主写真クラブ

2F 展示ギャラリーにおいて、インプリ会員の写真展を行いました。

3月6日に出品者が集まり、パネルの配置や写真展示を行い、7日から一般公開しました。期間中は、写真部員延べ 24 名が受付や作品説明を行いました。4 日間の来場者数は 225 名でした。回数を重ねるごとに増加し、嬉しい限りです。また、協会員も多数来場してくれました。

今年は約 100 名に案内ハガキを郵送し、最終日の終了時を 1 時間遅らせて 16:00 にしたことなども入場者の増加につながったのではないかと思います。（宇多川）



緑の窓

インタープリターの仲間に入って

第9期生 田中 和夫



私は東京下町（墨田区）生まれで、近所には、山どころか田んぼも畑もない場所だった。子供の頃から動植物が好きで、数少ない自然が残る荒川放水路の土手に毎日のように遊びに行った。

中学生になると山歩きを同級生と始め、奥多摩・丹沢・奥秩父・上越そして日本アルプスと足を延ばすにつれ、仲間との調整が難しくなり単独行が多くなっていった。時間に制約のある学生やサラリーマンでは天候で、休みの予定を変更する訳にはいかない。必然的に悪天候でも歩くようになった。

景色が見えないとつまらない、という人もいるだろう。雨だと下ばかり見て歩くのだから。ただ、私の場合は植物を見つめる事自体も楽しみでもある。植物に興味のない人よりは多角的に山を楽しんできた。これは12年前から始めたマラソンでも同じ。記録を狙って一所懸命に走ったのは最初の5～6年。各地のローカルレースを走ったり、100 km、200 kmと言ったウルトラマラソンに参加するようになると「旅行ラン」で沿道の風物、動植物を見ながらのんびり走るのが楽しみになった。指宿マラソンの翌日、開聞岳に登ったり、宮古島ウルトラの翌日に南国の珍しい動植物を見るのが楽しみだった。

インタープリター協会の仲間に入った事で色々詳しい人に教わったり、一緒に山を歩くことで、今まで以上に具体的に植物名などを知るのが楽しみになってきた。これからもインプりの仲間と共に、学んで行きたいと思えます。



ショウキラン

豆知識

雑草の話 13

理事長 関端 孝雄

この土手の下方にある溝は、いつも涸れていて水の姿を見たことがありません。ネコジャラシやメヒシバ、ツクサなど多種の雑草がその上を一面に被っています。

メヒシバの細い茎は細長い葉を多数つけ、特に根元では重そうに地面を這っています。地面に着くと節から根を伸ばし、そこから立ち上がる、これを繰返し長く伸びて行きます。立って斜上する部分は短いのですが、一面に広がる賑やかな姿になります（図1）。葉は裏に毛を敷き薄く艶のない柔らかなものです。葉舌があり、葉鞘には長い毛が生えています（図2）。一年草のイネ科植物で、日当たりの良い庭や畑、道路脇など各地いたる所に普通に見られます。高温や乾燥にも強く例のC4型の光合成を行うので繁殖力旺盛です。夏から秋にかけて数本の穂を放射状（散房状）に着けます（図3）。花軸には幾つかに分割された、ざらつきのある翼がついています。良く見ると、花軸に沿って2列に小穂が並びますが、片方の列だけに柄があります。長さ3mm程で披針形の小穂には2個の花を入れますが結実するのは1個です。特別な種子散布の術を持ち合わせていないのですが、それにしても1個体から何と数多くの種子が作られることなのでしょう。メヒシバは見たところ弱々しい感じですが、強害草とも云える雑草の要素を備えています。1つはC4植物であることから高温の地域であるほど成長速度が恐ろしく早いこと。多数の種子は一斉に発芽せず時期を変えて発芽すること、遅れて発芽しても秋には短期間で種子を成熟させる技があること、そして密集して来ると茎を高く立ち上げることなどです。なお、草食獣の腸をくぐって来た種子はその3割程の発芽率があり、これで遠方へ運んで貰えるようです。

イネ科植物がまた登場。それは、根本正之著「雑草社会がつくる日本らしい自然」によりますと、日本に生育する広義の雑草は500種以上あり、耕地雑草の48%がイネ科、キク科、カヤツリグサ科の3科で占められると云います。メヒシバは耕地雑草の代表格ですから、大当たりしたわけです。蛇足ですが、キク科、イネ科とマメ科は帰化植物の3大科と呼ばれます。

同属には、コメヒシバやアキメヒシバなどがあります。前者は全体が小型で、花軸に翼がありません。葉舌だけに長毛があります。後者は葉鞘が無毛でメヒシバのように地面を這わず、小穂が小さくて楕円形という特徴があります。



図1. メヒシバ



図2. 葉と葉鞘



図3. 穂

巨樹・history ①

渋川市北牧の人助けの『へだまの木』

第7期生 浦野 安孫

渋川市北牧の国道353号線沿いに、地域の方が「人助けのへだまの木」と呼ぶ巨木がある。

案内板には、「信州浅間山噴出泥押し実記」の記述を基に「記念木 人助けの榎(へだまの木) 天明3年7月浅間山の火災の際、溶岩吾妻川に氾濫して北牧の地も人家多数埋没した。その時この木に登った数拾人の命を救う。それより人助けの榎と称する。樹齢四百数拾年、木の高さ地下に6m、地上に9m、根回り4mと言われる」と記されている。最近の試掘調査で、この付近の天明泥流の堆積厚は約2mと判明している。従って、泥流に埋まっている主幹の深さは6mが2mに訂正されることになる。

当時人口570人の孀恋村鎌原で477人もの命を奪って吾妻川を流れ下った天明泥流が、北牧に到達した時、高台に避難出来ず取り残された付近住民が、この木に登って命が助かったと言う。泥流は吾妻川から利根川、さらに太平洋にまで流れ下り、約1500人もの命を奪っているから、この木は正に「人助けの木」と言える。

現地に行くと見ると、この木は写真の様に地上約50cm付近で、幹が大きく二股に分かれていた。当時は地上から約2m50cmの高さだったこの二股辺りで、住民は折り重なるように身を縮め、泥流が鎮まるのを待ったのだろう。しかし、流れが静まった後も泥流は粥状のままで、樹上からは地面に降りるに降りられず、高台に避難した人達が筏を組んで助けに向かい、救出してくれたと見聞録は伝えている。

「へだま」とはお風呂でおならをした時に湧き出る空気の泡の事で、「へだまの木」と言えば一般的にはカヤはカヤでも実が臭いイヌガヤの方を指すが、葉先のとがり具合からこの木はイヌガヤでなくカヤに思えた。実が落ちていれば精査出来たが、雄木のこの木に実はついていなかった。では、なぜ地域の方は「へだまの木」と呼ぶのだろう。屋敷の奥方が「この落ち葉を燃やすと臭いんです、だからへだまの木と呼ぶのでは・・・」と解説してくれた。

折角の機会なので、この木に数十人もの人が一度に取り付けるか登って見ると、多く見積もっても収容スペースは十人前後に思えた。見聞録の表現がオーバーになるのは良くある話だから、人数に多少誇張があっても、「北牧の榎の巨樹」の火山災害の語り部としての価値に変わりはなく、樹勢盛んであれ、と願った。



JA 北牧の向かいにある榎の巨樹



地域の人々が救出を待った場所？

<協会の声>

「ねえねえ、知ってる？」

第17期生 阿部 純子

知人のCaféに時々行くようになり、そこがインプリ活動拠点に隣接していたのがご縁の始まり。講師陣からいただく豊富な知識と気づきへのアプローチは受講生をその気にさせ「大人でもおもしろい」世界へ引っ張り込む。単純な私はお得感満載で帰宅して「ねえねえ、知ってる？」。やってみたいのは、一つの被写体を追い、どの季節でも名前がわかる図鑑。植物の芽吹き・若葉・つぼみ・開花・実・枯れ姿など。さらに昆虫、鳥類の雄雌や幼体、夏毛冬毛、鳴き声もよいと思う。他に地形の成り立ち。沼田の河岸段丘は有名で、現地学習できれば一目瞭然。郷土理解も深まりそうだ。谷川岳や赤城山、妙義山もいい。

今はとてもインタープリターの役割にはおぼつかないが「ねえねえ、知ってる？」の輪を広げていけたら、とてもうれしい。皆様どうぞよろしく。



雨乞山から見る片品川の河岸段丘

<協会が実施する事業・研修会等>

実施日	内容	会場
4月1日(月) 6日(土)	会員研修1 赤城の歴史探訪	赤城山鍋割山
4月21日(日)	第17回通常総会	花と緑の学習館
4月21日(日)	会員研修2 講演会「浅間北麓ジオパーク」	花と緑の学習館
4月29日(月祝)	2019 敷島公園まつり	敷島公園
5月6日(月祝)	会員研修3 「赤城山自然体験メニュー研修」	赤城山覚満淵周辺
5月12日(日)	「大人のための自然教室」開講式	憩いの森 森林学習センター
5月18日(土)	会員研修4 「ネイチャーゲーム勉強会」	憩いの森
5月26日(日)	連合群馬ふれあいフェスティバル	前橋公園緑の散策広場
6月2日(日)	会員研修5 「赤城山覚満淵ガイド研修」	赤城山覚満淵周辺
6月16日(日)	会員研修6 「浅間北麓ジオパーク」	鬼押し出し浅間園周辺
5月11日(土) 25日(土)、6月8日(土) 22日(土)	森林整備	サンデンフォレスト・インプリの森

<編集後記>先日、写真クラブの写真展に行きました。どれもステキな写真ばかり。ある人が「同じ場所でも、季節や時間はもちろん、太陽の日差しや雲の動きの違いでも、全く違う写真になるんだよ」と教えてくれました。やっぱり自然は面白い！私には今年、どんな出会いがあるのだろう。楽しみです。(前村)